

武蔵野日曜聖書講筵

至高善

――詩篇第16篇――

1976年7月4日

小池辰雄

キリストはわが避所 わが善福 本願の力 神こそはわが嗣業 大自然は自分の生命の延長
キリストはわが一切 いつでもキリストの中に祈入 詩「預言者の片影」(藤井武先生召天一
周年記念日に) 祈り

【詩篇16】(私訳)

ダビデの秘詩(ミクタム)

1 護り給え、御神よ！ あなたに私は依り頼む。

2 私は実存主^{エホバ}に告げた、「あなたはわが主、わが善福^{さち}はあなたを超えてある無し」と。3 この地の聖徒^{せいと}といえ、

彼らはまこと秀れたる者ゆえ、

彼らにわが飲むのすべてがある。

4 他なる偶像^{あだもの}に節^{せつ}を変える人の悲嘆^{かなしみ}は増しゆく、私は彼らの血腥^{なまぐさ}き酒費^{さかにえ}を何で灌^{そそ}ぎ得よう。また何で彼ら偶像の名をわが唇^{くは}にのぼせ得よう。5 エホバこそはわが嗣業^{ゆすり}、わが酒杯^{さかずき}の分前である。6 あなたはわが運命^{さだめ}を支えて在り給う。7 準繩^{はかりなわ}はわがために樂しき地におちた。げに嗣業^{ゆすり}はわが上に善福^{さち}となった。8 わがため謀^{はか}り給うエホバを讃めまつる、夜な夜なわが腎^{むらと}はそのことを論^{さと}す。

9 絶えず私はエホバをわが前に在らしめる。

彼わが右に在^{いま}すゆえ、私は断じて動かされない。10 さればわが心は欣び、わが栄光^{さかえ}は躍る。わが軀^{からだ}もまた安康^{やすき}に在る。10 そはあなたがわが魂^{よみ}を陰府に棄て置かず、
その愛する者を墓に臨ましめ給わぬから。

「あなたは生命の道を私に知らしめ給う、
 歓喜は溢るるばかり、
 あなたの在^{いま}し給う許^{もと}にある。
 諸々の悦^{たのしみ}樂^{とこしえ}は永遠にあなたの右にある。

●キリストはわが避所

今日は詩篇の16篇です。有名な詩篇をこのあいだから選んではやっているわけですが、16篇は藤井先生の好きな詩篇でした。7月14日は先生の日（召天旦）ですね。

私は自分の訳もあるので、それを読みながらいきます。

「ダビデのミクタムの歌」

とありますが、「ミクタム」ということは、学問的にどういうことかということとは、結論はないようです、私はいろんな参考書をもっているから全部調べてみたけれども。

16篇、56篇から60篇の、この六つの詩篇が「ミクタム」という詞書^{ことばがき}がついているわけです。詩の形からいいますと、56、57、59、60篇というのは

「三音格詩」（三歩格）「トリメーター」

といって、一行に揚音のところが三つずつあるわけです。ところが、16篇と58篇は

「四音格詩」「テトラメーター」

という。それから、イザヤ書38章には

「五音格詩」「ペンタメーター」

というのがある。

大体これはアラビヤ語、アッシリヤ語との連関で考えると、「隠す」「秘」——ギリシア語の、

「ミュエオー」（隠れたものを露^{あらわ}にしていく）

という、神秘主義、神秘思想、神秘という「ミステイク」という字のものと字ですが——非常に内容の深い神秘的な詩、そういうような

「奥義をもったもの、ミステリー、ミステリオンをもったもの」

と、そういったような気持ではないかと思われれます。そこで私はこれを、

「秘詩（ミクタム）」

と訳したわけです。マルチン・ルターは、

「黄金の宝のような詩だ」

と言ってます。

「護り給え、御神^みよ！ あなたに私は依^より頼む。

と。そういう言い方になっています。一番先に、

「護ってください、神さま。あなたに私は依り頼みます」

と。「依り頼む」という言葉は、



「隠れ所とする」

という言葉と同じ言葉です。具体的に、

「汝を隠れ所とする、さけどころ 避所とする」

ということと、「依り頼む」ということが同じだから、詩篇の言葉は非常に面白いですね。避所とする。詩篇46篇もそうです。

「神はわがさけどころ 避所。キリストはわが避所、隠れ場所、隠れみの 蓑だ」

と。依り頼むというのは、何かこちら側にただいるのでなくて、本当に隠れ所なんですから、神・キリストの中に入ってしまうわけです。入らなければ隠れるわけにいきませんから。

「さけどころ 避所」

という言葉は非常に素晴らしい言葉です。

「汝の中に入ってしまう、帰入してしまう」

と。これは

「南無キリスト」

の「南無」ですから。だから、

「護ってください、神さま！ あなたに私は逃げて行きます。あなたの中に私は入って行きます」

ということと、「依り頼む」よりか

「入って行きます」

という方が非常に具体的でいい。

藤井先生は私たちに

「信頼」

ということを非常に言われましたが、信頼が何か「こちらから信頼する」というひとつのあれ「観念」になると、信頼ということが今度は苦しくなる。けれども、

「あなたの中に入ってしまう」

というと、これはいいじゃないですか。私の信仰の世界は非常に図太いので、簡単であります。何しろ入らなければどうにもならんですよ、いくらこちら側にいて「信頼」なんて言っただってね、観念で。それが祈りの世界なんです。「祈り入る」んです。祈ると言っただって、入らなければダメです。「祈入」する。正にこの

「南無」

と同じです。

「帰入」

帰入る。

「祈入」

祈り入る。漢字というのはおもしろいね。



もうこの第1節を見ただけでも——こないだ詩篇121篇で「護り」ということを言いましたが、「シャーマール」という字と同じ字です——「護ってください」と。

「護ってください」

ということは、自分を祈入する、祈り入る、帰り入る。祈りの世界でキリストの中に入ってしまうこと。これが

「汝を隠れ所とする」

ということですよ。卑怯な人間がただ逃げるということではないですよ。

この秘訣を得たら、もういつでも力がきますから、どんな時でも。キリストの中に祈り入って力のこないことはないですから。

「福音は言葉ではない。力である」

と。本当にそうです。だから、私たちは旧約の詩篇を読みながら、旧約の作者以上の世界にこの新約の力で入って行くんです。

●わが善福

²私は実存主^{エホバ}に告げた、「あなたはわが主、

わが善福^{さち}はあなたを超えてある無し」と。

「わが幸^{さち}」という字は、あて字をすると

「善福」

という字、「善」という字なんです。それは、「福^{さいわい}」という字と「善^{よい}」という字が同じような言葉で使う。

「わが善福^{さち}は」

という。

「恵福」

とも時々言いますが、この場合はむしろ善福です。

「至高善」

と今日の題に書きましたが、これは別な言い方で言うところ。

「至福」

でもいい。至る福^{さいわい}、

「これ以上の福はない。あなたを超えてはない。あなただけが私の善福^{さいわい}だ」と。

「あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸^{さいわい}はない」(口語訳)

と、口語の方に訳してあります。善福、あるいはある時は「善美」であります。

³この地の聖徒といえは、

彼らはまこと秀^{すぐ}れたる者ゆえ、



彼らにわが歓びのすべてがある。

「³地にある聖徒は、すべてわたしの喜ぶすぐれた人々である」(口語訳)

まあ相対的な意味ですね、これは。大したことはないです。しかしまあ、

「神さまを歓喜とし善福としているこの聖徒、その人たちは同じ気持ちだから喜びがある。彼らにはわがすべての歓喜がある」

と。歓喜を共にするわけだ。善福は必ず歓喜が伴ってきます。

「神さまはわが一切である。キリストはわが一切である」

というところに来ると、私はうれしい、歓喜の世界。歓喜を共にするから、彼らもまたわたしの歓喜であると。

「ミットライデン」「共に苦しむ」

というのと、

「ミットフロイデン」「共に喜ぶ」

ということ。歓喜を共にし、苦しみを共にするのがこの聖徒の交わりであります。

●本願の力

⁴他なる偶像に節を変える人の悲嘆は増しゆく、

私は彼らの血腥き酒贅を何で灌ぎ得よう。

「他なるもの」というのは偶像のことです。即ち、偶像崇拜に変節するもの、ヤーヴェー

の神を拝まないで、他の神々に心を寄せる者は悲嘆が増していく。そして、そんな神々に何か献げものをしている。血なまぐさいところの酒贅。自分はそんなことを一緒にするわけにはいかんというわけです。

また何で彼ら偶像の名をわが唇にのぼせ得よう。

「血の濯祭」と書いてあるね、同じことです。善福であると同時に、これは平安であります。善福を目安の宗教ではないですよ。それでは御利益になる。

「神さまと共に在る、神さまの中に在る、一つになる」

ということが至福の世界、至高善の世界です。それは善福な事態であります。また歓喜が伴うのであり、本当の平安がそこにあるというのは、その事態から発するところのいろいろな状況であります。

「わが魂は汝のうちに安らうつまでは平安を得ず」

とは有名なアウグスティヌスの言葉です。『コンフェッシオーネス』『告白』に出てくる。

「我々の魂は、汝のうちに安らうつまでは平安を得ないように、あなたは我々を創造なされた」

と彼は言った。我々が造られているのはそのようなわけです。

「我々の意志は、汝のものとならんがために我々の意志である」



とはテニスの『イン・メモリアル』の言葉。ダンテの『神曲』の中にも似たような言葉がある。そういう平安、神さまとのほつきりした結びつき。何ものもこれを切ることができない。そこに平安がある。

「神―キリスト―我」

の関係は最も深い関係で、いかなる事態もこれを切ることができないというところに平安があるわけです。これは本願の力だから切ることはできません。

「自分の信仰が強いから切れない」

なんてなことではない。本願の力だから、本願の力でもって上からしつかり捉まえられているから、この本願の力で。

●神こそはわが嗣業

5 エホバこそはわが^{ゆずり}嗣業、わが^{さかすき}酒杯の^{わけまえ}分前である。

あなたはわが^{さだめ}運命を支えて在り給う。

「^{しぎよう}主はわたしの^{しぎよう}嗣業、またわたしの^{さかすき}杯にうくべきもの。あなたはわたしの

分け前を守られる。」(口語訳)

これは非常に大事な節です。神さまこそはわが^{しぎよう}嗣業である。ドイツ語の「エルベ」(Erbe)という言葉です。英語では「ポーション」(portion)か。

「分け前」とか「嗣業」とかいうことで、ちょっと思い出したから、シラーの詩をご紹介しましょう。

「世界の分割」(ディ タイリング デア エールデ)

という詩がある。だいたい、こういうことが書いてある。これはギリシア神話的な素材で書いている。

『ゼウスの神さまがオリンピアの高い所から人々に向かって言った。

『この世界をお前たちは取りなさい。世界はみんなお前たちにやる。嗣業として贈る。

永遠の封土としてやる。みんな仲良く分けなさい』

すると、老いも若きもみんな急いで、それぞれ思う所に出かけて行った。農夫は畑に向かって収穫を取ろうと思って、畑の方に行きました。それから、騎士は森に猟に出かけて行く。森は私たちのものだというわけだな。それから、商人は、自分の倉庫をしっかりと囲って蔵をたくさん造った。坊さんは高貴な葡萄酒を貯えた。王様は橋や道をいろいろ造って、十分の一は私のものだ、税をもらおうと。ところが、全く遅れて詩人がやって来た。遠くからやって来て、どこもかしこも見ても、みんなもうそれぞれ持ち主があつて、これは私の物というものが見つからない。困ったことだと。神さまに向かって、

『あなたはこの忠実なあなたの息子をお忘れになりましたか。何とかしてください』



と、声高にお願いした。けれども、ゼウスの神が、

『お前は夢の国に居たんだろう。私に今こんな事を言っつて、もの言っわけじゃなからうが。みんなが世界を分割した時に、一体お前はどこに居たのだ』
と。そうしたら詩人は言っつた、

『私は実はあなたのもとにおりました。私の目はいつもあなたの御顔を見上げていました。また、この天界の調和の調べを私の耳は聞いていました。あなたの光に私は酔っつて、そして地上の事は忘れていたんです』

そこでゼウスの神は、

『そうか、それじゃあ、もう収穫も、狩猟も、漁も、市場も、みんなもう私のものじゃないので、分けてしまつたから、お前はいつでも来たい時に、このわたしの天界にやつて来て、わたしと一緒に生きなさい。いつでも天の門は開いているから』

と。そういう詩なんです。詩人が地上のものを問題とせず、神と天界を問題としている。即ち、この詩人にとっては、

「ゼウスの神はわが嗣業」

というわけです。

「地界にありながら既に自分は天界の者である」

と。こういうことをほめかしているわけです。これは何も詩人に限らない。我々キリストの者は即ち、地上において既に天国人で、

「われらの国籍は天にあり」

というわけです。実はその天界をもっている。地界ではなくて天界を持つているような在り方。天界を本当にもっている人は、実は地界に何もなくても、地界をもう既に、無一物無尽蔵で一切のものを自分のものと思う。

●大自然は自分の生命の延長

12世紀の後半、セント・ベルナルという、ベルナル・フォン・クレルボー (1090 ~ 1153) という人は——アッシジのフランシス (1181? ~ 1226) とベルナルは中世のそういった非常に天的な人格はこの二人でしようね——彼は全くキリストの直弟子と同じような生き方をした。無一物無尽蔵の在り方をした。それで、

「大自然が本当に自分の生命の延長」

と思つていた。神と自然と、そこにおいて彼は呼吸しているような人だつた、このベルナルという人は。だから、何物も私しないが、一切を持つている。

パウロの心境がまたそうです。だから、神・キリストを持つ者は、実は一切を持つ。

「万物を賜らざらんや」

とパウロがロマ書8章で言いました。とにかく、パウロというのは凄い。



我々の信仰の心の豊かさというものは、本当の貧しさが本当の豊かさなんです。

「ゼロ＝無限大」

「無即無限無量」

と申し上げているのはそのことです。

「主はわたしの嗣業、またわたしの杯にうくべきものである」

と。詩篇23篇の、

「わが酒杯はあふるるなり」

我という酒杯は溢れているという。そういう在り方になるといって、何かしらんが、

「我もなく世もなく、ただ主のみいませり」

と。それはもう溶けて入ってしまったている。「融合」という言葉は、私はわりあい好きなんだ。

「神は愛なり」

と言います。では、義はどうしてくれるかというところ、義は愛の中に溶けているんです。溶けている。

あの塩水、海水、これは塩が溶けてしまっている。海水はなめれば塩辛い。私は泳ぐのは、プールは嫌いなんだ、海で泳ぐ。この海水の姿です。海の中へいろんなものがみんな流れ入っていく。悪いものもみんな。これを終いには塩辛くしてしまう、浄化してしまう。そういう海の水。また大地。

そういった自然をまあお害するようなもの、凄いが出来たね。自然を損なっているうちに今度は、人間は結局、自殺行為をやっているわけだ。「大自然と共に生きる」ような生き方をしないからとんでもないことになる。自然を愛するというのは、そういう心根というものが非常に失ってしまった。まあ、日本人は夏休みでもってあっちこっちを汚す。今度は掃除をする人が出てくる。ただ外側を掃除したってダメなんです。問題は本当に自然を自分の生命の延長として愛するか。そういう意味で、お前は自然を汚すということは自分を殺すことだということ。

●キリストはわが一切

「主はわたしの嗣業、わが杯にうくべきもの」

「キリストは私の一切である」

と。これは要するに、詩篇16篇の根本の告白なんです。

6 準繩はわがために樂しき地におちた。

げに嗣業はわが上に善福となつた。

レビ人たちは別に貰わない。神に捧げた物の十分の一を貰って生活していた。だから、レビ人は神の物を、即ち譲り受ける。そいつをもうひとつ貰くというところ、十分の一という



ものではないので、神自身ということになるわけです。レビ人は祭司でしょ。執り成す人。

「神・キリストはわが一切である。わが嗣業である」

と言ったら、今度はこいつをまた人に譲らなくてはいいかん。これを人に与える。一切であると言つて、至福の中にただ坐っていたってダメです。嗣業は譲るんです。これは人に分かち与える。

自分はいつも無です。

「無者」

無者を通して無限なものが来て、また無限なものが他に分けられていく。これが本当の生命の伝道です。伝道とは、道を伝えるとは、「伝生」、生命を伝える――「伝生」なんていう言葉はないけれども――

「神の生命を伝える」

これが「愛する」ということ。生命を分け与えることが愛するということなのです。

「^{はかりなわ}準繩はわがために樂しき地におちた」

というのは、本当に樂しき天におちたんだ、地ではないんだ、本当は。

7 わがため^{はか}謀り給うエホバを讃めまつる、

夜な夜なわが腎^{むらと}はそのことを論^{さし}す。

8 絶えず私はエホバをわが前に在^あらしめる。

彼わが右に在^{いま}すゆえ、私は断じて動かされない。

「私は絶えず主の前に自分を置く」

と同じことです、「私はたえず主をわが前に置く」とは。自分が主の前に待^{はべ}ることをこんな言い方をしたわけだ。

「⁸わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わた

しは動かされることはない」(口語訳)

「右にある」ということは、「力となっている」ということです。

「わが力であるが故に、わたしは不動である」

「主はわが力なるが故に、我は不動なり」

と。

9 さればわが心は欣^{よろこ}び、わが栄光^{さかえ}は躍る。

わが軀^{からだ}もまた安康^{やすき}に在る。

「⁹このゆえに、わたしの心は樂しみ、わたしの魂は喜ぶ。わたしの身もまた

安らかである。」(口語訳)

「心、魂、身体」、みんな全存在をただそういうように言つたわけです。この「魂」という訳は、もとの「マンズレットテキスト」(マソラ本文)では「ケボディー」だから、「わが栄え」という字不仅能够、そいつを魂に、靈に読み替えてしまつてあるな、わが栄えということ。



「楽しみ、喜び、安らかである」

と、この三つの言い方でもって。

●いつでもキリストの中に祈入

「¹⁰あなたはわたしを陰府に捨ておかれず、あなたの聖者に墓を見させられないからである。」（口語訳）

¹⁰そはあなたがわが魂を陰府^{よみ}に棄て置かず、その愛する者を墓に臨ましめ給わぬから。

と、私はそう訳したんですが、「愛する者」とは、こちらは「愛せられる者」です。

即ち、この詩篇では、旧約の非常に暗い陰府の世界に対して、もうひとつ

「汝と共に、汝のうちに」

ということが、そういった死の世界を征服することをここにほのめかしているわけです。

「陰府に捨て置かず、墓に臨ましめ給わぬがゆえに」

と書いてある。

¹¹あなたは生命の道を私に知らしめ給う、

歓喜は溢るるばかり、

あなたの在^{いま}し給^{もと}う許にある。

諸々の悦^{たのしみ}楽は永遠^{とこしえ}にあなたの右にある。

正に、

「汝のもとに歓喜あり。これが生命の道、本当の生命道だ」

というわけです。

「生命の道は神の中に宿ること、神と共にあること、神のもとにあること」

それは横でも中でも要するに――みなここではいろんな言い方をしていますけれども、前にとか――要するに、神さまと離れないことだ。

「キリストは離れない。キリストはわが前に、わが後に、わが内にある。これが生

命の道だ」

と。それはもうそうだよ。

「われは生命なり、われは道なり」

とキリストが言っておられる。

「われは道であり、われは生命である。われは真理である。」

これが喜びの音信であるという。そういう意味において、この16篇はある中心をしつかりうたって、極めて新約的な詩篇です。

「¹²あなたはいのちの道をわたしに示される。あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみがある」（口語訳）



と。うれしくてしょうがないわけだ。

諸々の悦楽は永遠にあなたの右にある。

と。平安も、喜びも、みんな力を持っています。浮いてない。浮いた喜びはひっくり返るよ。浮かない本当の底力のある喜びの世界です。

何を失っても、何を持たなくても、どんな物を持っていたとしても、もしキリストを持たなかったら、もし神さまを持たなかったら、いつでもキリストの中に祈入することを自分の生命としなかったら、それはもうつまらんです。

「祈入」

という言葉はよく覚えてください。祈り入ること。そういうことで、キリストをいつでも、これはもう毎日の生活で必ず体験してくださいよ。

●詩「預言者の片影」（藤井武先生召天一周年記念日に）

7月がくると、藤井先生は私にとって特別な先生でしたから、思い出さざるを得ませんが、先生が亡くなって一周年のときに私が新町の残党と集会をしたときに、私が読んだ詩があるんです。1931年7月14日に作った詩です。45年前の詩だね。「噫、七月十四日」という題です。

〔註：後に「預言者の片影」に改題され、小池辰雄著作集第八巻『詩歌集』（1986年刊）「藤井武先生の片影」に掲載された。その際に一部書き直された。本講筵で朗読された詩「噫、七月十四日」のうち差異のある部分（書き直し前のもの）を書き直した句の下に「」で、また削除された部分を【】で記す。〕

預言者の片影

〔噫、七月十四日〕

（一九三・七・一四）

—— 召天一周年記念日に ——

真白き帆影空に漂ひ

滴る緑葉幕屋を地に張り

よろづのものの輝く真夏、

新町の里に一人の預言者

ためらふことなき夕陽の如く

その逞しき姿を消した。

語らず言はず叫ぶことなく

ただ悲壮なる目指に

言ひ知れぬ愛を地には遺して。

〔その雄々しき姿をかき消した。〕

〔ただただ悲壮なる目指に〕



その日その夕は巡り来つれど
還り来まさざるはその人である。

時の車よ、などて彼をも還さざる！

子であり、父であり、兄弟であり、
友であり、われらには恩師たる

人らしき人は去りて今亡し。

噫、今は亡き藤井先生！

いかでかく速かに去り給ひしよ、
はや一年が過ぎゆきしとは。

人よ、小さき群を愛せし人。

そのなつかしき忘れな草の
葉の片影をうつし出ださん。

ある秋のうつらかなる一日

1927年11月4日のこと、

師に伴ひて数なき我ら

五、六人です。

三浦半島を歩き暮した。

一包みの弁当箱をステッキに

結びつけてやをら肩にかき、

おのれも必ず荷を負つべしと

弟子らに一歩も譲らざる心、

眼眸を遠く海と空とに

指し向けて悠々と歩む姿、

今もなほわがまなかいにある。

陽は靉靆たる雲にかくれて

我らの歩みは未だ尽きない。

往き尽きて半島の端に

到りしわれらを月は迎へた。

やがて三崎の岩頭に立つ。

名にし負ふ城ヶ島なる燈台の

光の明滅は夢か現か。

空ゆく雲は月華に映えて

白鳥の飛び渡るにも似たり、

時しも懸れる天心の星座

〔その日その夕ここに巡り来たり〕

〔時の車よ、などて彼をも運ばざる！〕

〔人らしき人は還り来らざるか。〕

〔噫、今は亡き藤井先生！〕

〔人よ、我らを愛せし人。〕

〔葉の一片を想はしめよ。〕

〔師を囲みて数なき我ら〕

〔眼を遠く海と空とに〕

〔今もなほわがまなかいにあり。〕

〔歩み終りて半島の端に〕

〔辿り着けば半月は東に。〕

〔白鳥の飛び渡るが如くに、〕

〔今しも天心に懸れる星座〕

シグナス
白鳥と奇しき冥合を示した。

やがてわれらの喉の渴きを

癒さんと武蔵野の牧人は

察したまえる新町の牧人は

大いなる美果をとり出し給つ。

これ、さきに途にて購求ひし品

これ、さきに求められし品、

師の愛こもる有の果の味、

その有の果の味はいは、

ネクターも此の如きか。

夕空に突如流れ渡る声、

師の心腸より湧きたつ曲調！

「清き岸辺に」の讃歌であつた。

声に応へて吾らも歌ひ、

うたひ終りていくばくもなく

小さき群のため祈り給つ。

師は心をこめて祈り給へり。

岸辺の祈りは胸底に泌みた！

三崎の波よ、潮風よ忘るな！

城ヶ島岸辺の波よ、潮風よ忘るな！

我ら生きて祈りに応へん。

真鶴、連光寺、溝ノ口、

三度びの散歩の想ひ出は

いづれ深からざるものやある。

「ネクターにも劣らなかつた。」

「夕空に流れ出でし声あり、」

「清き岸辺に」の讃歌なりし。」

「祈りは今もわが胸に余韻を残す！」

「真鶴、連光寺、溝ノ口の、」

「続く三つの散歩の想ひ出」

【かかる恩恵の露をして

徒らに涙のもととはせず

新たなる希望の油とはなさん。

さはれああ去りぬる年のこの夕べ

我らの師の往きしことは

実に哀しみの極みにぞある。

闇よ、誰がためにおもてを被つか。

雨よ、いかなればかくぞ降る。

言よ、助けを何に求めん。

く過ぎにし夏の光にかへて



新町五年、いかなる聖日も

休むことなく私は貫き、

聖書を親しく学び通した。

午後にはミルトン、ダンテ、カントを、

聖書の原語をこれに加へて

学びし恩恵^{めぐみ}いつか忘れん。

預言者の死、聖言^{みことば}は深い。

その実存と愛に迫られて、

天の恩師と私は進む。

聖意^{みこころ}かしこみ聖霊により、

いつかは折らるべき杖を執り

何たる暗き空のおもはゆ

私は知らない哀しみの果てを

さはれ思へ、聖意^{みこころ}のゆえに

この世を棄てて真理に生きた

この師こそは愛の極み。

哀しみを変へて力となすは

この愛のわざなりと聖書は告げる

キリストの十字架により

あるとき私も道のべに

世に死するの道と道標^{しるべ}を見て

よしと答へしことがある。

噫、忘れられぬ新町五年

わが師に仕ふるゆえんのは

涙に非ず言葉にも非ず

この師の道を聖霊により

いつかは折らるべき杖を執り

聖言の燈火をたよりに

森を経て谷間を辿り

川を渡りて彼方の岸の

戦^{いくさ}の場なる荒野に出でて、

幾歳^{いくとせ}か神の呼び給うまで

福音^{いふくみ}の戦^{いくさ}を戦ひ貫^ぬいて

曠野の死を死なんと思ふ。】



聖言の燈火をたよりに

私は往かう、森を経て谷に出で、

川を渡りて彼方かなたの岸の

戦いくさの場なる荒野に出でて、

いつの日か神の呼び給うまで

愛の戦いくさを戦いくさひ貫ぬいて、

「曠野の死」をひとり賜はろう。

縦たとひ人々に棄てらるるとも、

負おひきれぬ十字架の下より

シオンの山の主を仰みぎ瞻みん。

まあ、そんなことで、我々、この詩篇16篇を本当に自分の歌として、キリストの中に本当に祈入し、

「汝はわが力の避所」

と言って、いつもいかなる瞬間にも、どんな時にもこの力を得て進んでいきたいです。これは本当に秘訣です。秘歌。秘訣。力の秘訣です。

まあ

「信仰、信仰」

なんて言ったって、要するにキリストの中に、御霊をもつて十字架の門を通って祈り入れれば、必ずキリストの中に入るから。もうそうしたら、力、生命、喜び、愛ならざるをえない。何をしてても本当に創造的に展開し、そして本当の人助けをすることが出来る。この福音を他の何ものと代えることができるんですか。どうぞ、元気で行きましょう。終わります。

● 祈り

南無キリストさま。この1976年前半、あなたのおん導きのもとにここまでやって参りました。まことに蹉跎たる歩みでございましたが、しかし、あなたのみ力は力強く、あなたに接するたびに、ああ本当にハレルヤ！と御名を讃えつつ参りました。兄弟姉妹たち、この御名のゆえに、御名にあつて、互いに信じ、互いに忍び、互いに荷い、互いに祈って参りました。

それから外れているところの兄弟たちがあります。彼ら(Tu, Su, Ha, Ki, Ka, Hu)はヨルダン会の連中であるのに、小生正直何事かと思つています——私が間違つていたらおゆるしてください——彼らが何に迷っているか、文学か、文化か、また哲学か。パウロが、

「この世の小学に煩わづわされるな、迷まような」

と言いました。この福音を身につけて、いずこにさ迷うか。実に、神さま、本当に彼らが



この福音の福音たることを新しく受けとり、そして、あなたに立ち返ることが出来ますように願ひ奉ります。一切はこの福音を身につけることから始まります。このようにして、彼らを愛するがゆえに私は怒ります。

どうぞ、彼らが本当にそのようにあなたに立ち返り、そして本当にこの十字架の何であるか、聖霊の何であるかを身をもって受けとることが出来ますように。人間的相対的なことを乗り越えて行くことが出来ますように、願ひ奉ります。

今日はまた、詩篇16篇を通し、かつての藤井先生を想いでしたが、この40何年か前が昨日のようであります。先生のこの志を継いで、しもべはまことにふつつかな弟子であります、しかし、貫きます。御名のゆえに貫いて参ります。

どうぞ、この使徒的な信仰の中に立ち入らしめられて、もはやいわゆる「無教会主義」ではありません。本当にこの福音は、知れると知らざるとにかかわらず、あなたは知りたもう。まことの中にいよいよ私たちは入れられて、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

の主さま、いかにもして私たちはこの破れ器の中にあなたを入れ奉り、そして福音の証をせずんばいられません。そのほかに何事もできません。何をしていても私たちは同じこと。ただ福音の証をせんことだけであります。

どうぞ、その意味において、私たち、夏は集会があろうがなかろうが、本当の意味において互いに相祈り、相集いながら、御前に進んで参ります。

かくして、いろいろな集会をとおし、そして最後には鹿沢の大集会をとおして、そこにまごころをもつて集まってくる兄弟姉妹たちと共に、いよいよあなたを受けとり、また秋の闘いに進んで行くことができますように、切に願ひ奉ります。……

